

言ノ葉

蟻侏

僕はまだ、あなたの絵を描き続けている。
あの日から今まで。そして、これからも。
ずっと、ずっと。

別れなんてモノはいつでも、どこにでも潜んでいて、
何でもないような顔をしている。それでいて突然その刃
を僕たちに向けて来る。

すべては偶然。そこに一切の関連性などない。偶然に偶
然が重なっただけ。ただそれだけ。

私はあなたが本当に好きだった。ほんの短い間しか隣
にいられなかったけれど。あなたを連れて行ってしまっ
たのは、真つ黒の影。影は月光に照らされ、一片だけが
その光を受け鈍色に煌めいていた。低い啞いが充満し、
石を削るような音だけがやけに鮮明に聞こえた。その後
の長い暗闇をどのように過ごしたか、僕は憶えていない。
僕はまだ幼かったので、何が起きたのか分からなかつ
たし、なぜあなたが突然いなくなってしまうのか理解
するほどの知識を持ち合わせてはいなかった。

でも、僕は生きています。成長する。成長すれば今まで
遠すぎて輪郭すら朧げでいて、見えてはいなかった「死」

という存在は日に日に存在感を増し、あなたがそれに喰
われてしまったという事を嫌でも理解しなければならな
かった。

あなたはもう、この世界にはいない。

死んでしまおうかとも思った。でも、できなかった。
僕が生きている事が、あなたの唯一の救いになるなん
て高尚なことを考えた訳ではない。単純だ。僕はただ「死」
が怖かったのだ。

だから僕は今、絵を描いている。何枚も、何枚も。同
じ絵を繰り返し、繰り返し。幼いころ見ただけのあなた
の絵を。

その輝きをもう一度見たいという一心で。

ただそれだけなんだ。

でも、上手くいかない。何度描いても、どんなにあなた
のことを鮮明に思い出しても、その輝きを現世に蘇らせ
る事はできていない。

理由なんて分かり切っている。
それでも僕は描き続ける。床一面には今まで描き溜めた
数百にも及ぶ同じ題材の絵。しかし、どれを取っても同

じモノはなく、本物になど遠く及ばない。

「それでも描き続けるの？」

非道く清らかで、澄んだ声がそう問いかける。

「描き続けるさ、そして描き上げる。この先、何年かかっても」

そう答える僕の声は弱弱しかった。

外はずつと雪が降り続き、この家を、町を、国を、世界を白く染め上げている。緑深い季節を経て、紅の差す季節はとうに過ぎてしまった。何年もずつと、この世界は白いままだ。

だんだんと、世界は色素を失ってゆく。

「その輝きは、その人だけのものだよ」

そんな事改めて言われなくなつて、十分すぎるほど理解している。

この作業が徒労で終わる事なんて、痛いほど分かり切っている。

でも、それでも、失ってしまった輝きを今一度得るには、形を与えなければならぬ。

「私がいるのに？」

それも分かっている。君は僕にとって大きな支えにな

っている。こんな作業を続け、未だ理性を保っていられるのは君のおかげだ。今では、僕の心の大半を君は担っている。

「それでも描き続けるの？」

その声は嗚咽を噛み殺したような響きだった。

哀しそうな顔をされても、それでも、僕は描き続ける。

君も分かっている筈だ。他人の代わりになど誰であつてもなれないという事など。そう、誰であつても。

こんな事を言つたら君は、更に悲しそうな顔をするだろうけれど、途中で投げ出すことはできないんだ。それが生きている僕のあなたに対する、ほんの少しの手向けになると思っているから。

自分の死を悲しんでくれる人がいるから、人は今ある生命を精一杯生きることが出来る。

それはとても大切な事で、幸福な事。

あなたは毎日のようにこの言葉を口に出して言っていた。あの頃はその言葉の意味を半分も理解していなかったと、ようやく今になって理解する事ができた。

僕にも僕の死を悲しんでくれる、僕の事をとても大切に思ってくれる人ができた。

彼女はただじっと、穏やかな目で僕を見守ってくれている。僕も彼女の事をとて大切に思っている。決してあなたを忘れようなんて思っていない。

でも、今この瞬間の幸福を、掌の中の幸福を愛する事くらいは許してもらえらるだろう。

そして、どうかあなたにも祈ってほしい。僕達の幸福を。この町に、国に、世界に命芽吹く春の季節が訪れる事を。暖かい光の粒が舞い降りる事を。

僕はいつでも、いつまでも、あなたが心安らかでいられる事を願っているから。

どうかいつまでも。母さん。

今いる部屋の床一面はその本来の暗い茶色はほとんど見えなくして、鮮やかな色を所々に見せている。それでも、外と同じ白が大半を占めている。部屋の角に置かれた少し硬いソファに、彼女は横たわっている。光は灯していない。それでも雪の照り返す自然の光がやけに明るく、不自由は感じなかった。

赤い輝きが世界を照らす。その輝きはとても温かく、白一色のこの世界できちんと存在を保っている。人がこの光に安堵を覚えるのに、明確な理由は要らない。いつ、どこにいたって、それは本能が指し示してくれる。

「何をしているの？」

いつの間にか彼女は寝てしまっていたようで、目をしばたかかせている。眠りから覚めた彼女にとっては眩しいようだ。ぼんやりとしたその瞳の光を受けて、僕は思わず頬がほころぶ。

「送っているんだ。ちゃんと、届くといいいけれど」

彼女は一瞬呆けたような顔をしたが、ぼんやりと意味を掴んだようだ。

「大丈夫、きつと届くよ。どこにだって……ね」

そう言っただけで彼女は柔らかくほほ笑んだ。その笑顔で僕はいつも励まされる。どんなことだって成し遂げられる気がする。

「ああ、そうだね。きつと」

世界はまだ寒いままだけれど、ここには確かに、二輪の花が力強く咲いている。お互いの事を気に掛けながら、お互いに寄り添い合いながら。

じつと、春の訪れを待っている。

そう、命芽吹く季節を。

いつまでも。